
IS インフィニット・ストラトス 適当な性格のオリ主

シムトラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 適当な性格のオリ主

【Nコード】

N2543R

【作者名】

シムトラ

【あらすじ】

適当な性格でなんかイロイロ歪んでるオリ主による原作介入。設定を崩すな。男は2人もいらぬ。主人公最強マジウゼエ。俺は新世界の神になる。そんな人たちはブラウザバックでゴーホーム推奨。無性に書きたくなって手を出してみたただけなので、好評なら続く。不評なら打ち切る4

Prologue

寝返りを打った拍子。

鼻元を掠めたシーツから香る、何ともいえない匂いに意識を浮上させる。

のっそりと起き上がり、まだ覚醒しきつてない頭がとりあえずと水分を欲していた。

その欲求に逆らうことなく、ベッド脇のこじんまりとしたサイドボードからグラスを手に取り、一気に煽る。

あまり好ましく思えない、とりあえず自分で選べるなら違うのを選ぶだろう味が舌を刺激する。

タダというのを差し引いても、炭酸水で割ったコアントローというのは合わないらしい。炭酸などとうに抜けてしまっているが。

よくもこんな酒を用意しやがって、と思いながらもようやく機能しだした頭がとにかく部屋の喚起を命じる。

ヤニと酒と汗と、シーツに染み付いた自分のものではない、横で眠る女の甘い香りが醸し出す混合臭。

寝室にするには最悪の環境だ。

が、シーツから出るのは酷く億劫だった。

今も起き上がって上半身が顕になっているだけでこの寒さなのだ。窓までたどり着く前に、きつと俺は凍死してしまふに違いない。

再びのっそり横になりシーツを引き上げ、横で眠る女を手繰り寄せ
る。

そうするだけでも鼻腔をくすぐるのは女の甘い匂いが大半を締め、
加えて腕の中には柔らかな感触の最高の抱き枕だ。

これはなかなか寝るにはいい環境だななどと思いながら一度寝に移る。

途端に響く、無機質な、買ったときから何の設定もなされていない着信音が静まり返った部屋に響いた。

•
•
•
•
•

いつそ無視するか？

誰からの着信からかも確認することなく、そんなことが頭を過ぎる。

「
・
・
ん
・
・
ん
う
・
」

「つち」

腕の中で女がうつすらと目を開け、緩慢な動作で起き上がる。シーツがズレ、襲い掛かる寒風が一気に眠気を奪っていった。俺だけじやなく、彼女も。

「でないの？」

「ドネド」

朝の挨拶すらすることなく、短く会話を終えると未だなり続ける携

帯を手取る。

これだけ放置しても切れない、ということは何か大事な用件なのかも知れない。

「誰だ？」

「私だ」

ついさつきしたような、短いやり取り。

それにしてもこの声は、ふむと即座に脳内検索。

「私ださんか。生憎と知り合いになった記憶はないが、ひょっとして番号を間違えてないか？」

「・・・切るぞ」

「用件も聞かなくていいなら」

「・・・この間の話だが」

ごまかしたな、と思うもそんなことは口にしない。

その用件について必要であったのはあちらでも、頼んだのは俺だったからだ。

そうでなかったら、こんな時間の電話。文句だけ言って直ぐ切っている。

「入学審査は無事終了した」

「結果は？」

「お前が落ちるわけがないだろう」

そりゃそうか、とサイドボードの上のタバコを加え吹かすと、シーツを巻いただけの扇情的な姿の女が、何やら空のグラスを恨めしそうに見ているのが目に映る。
その足元に転がる空の瓶も。

健康でスマートでシャープに生きていきたい俺からすると、起きた直後から酒をかつ食らうなんてのは理解できない。

「しっかりと食事はとっているのか？」

「なんだ、いきなり」

あまりにも急な方向転換だ。酷いと言ってもいい。

「大丈夫よ、私がいるもの」

「・・・女か」

後ろから、わざわざライターを使わず俺のタバコから火を得た女がそのまま電話の向こうの、これまた女に声を掛ける。
途端に声に不機嫌さが混じったのを感じ、面倒なことをしてくれると内心で毒づく。

「・・・ふん、信用できんな。玫瑰斗、回線を開いてくれ」

回線とは言わずもがな。テレビ回線だろう。

「ああ・・・それはやめといたほうがいい」

「なに？ なぜだ？」

「なぜって・・・俺は服を着てないからな」

たぶんテレビ回線を開いていたら、それはそれは綺麗な青筋が見れただろう。

電話越しに、そんなシーンを想像させる音がしていたから間違いない。

ついでにぶつり、と乱暴に切られた回線からも。

ほんの1月と半分ほど先に会うことになるというのに、なんと面倒な種をまいてくれたのか。

フィルター間近のタバコを灰皿に押し付け沈下すると、復讐も兼ね、後ろから片腕で形良くくびれた腰を。反対で抱きしめるように首に

手を回し彼女を引き寄せる。

が、そんな行動にも彼女はクスクスと笑うばかり。

そんな余裕な態度が気に入らないのか、はたまた単に朝から欲情したのか。

まるで上等な絹のように肌触りのいい彼女の体。肩甲骨から舌を這わせ、鎖骨に軽く吸い付く。

「・・・っ・・・けほっ」

煙がいいところに入ったらしい。

しばらくむせていた彼女を満足げな表情で見ていた玖瑠斗だったが、美しいシルバールブอนด์の髪を持つ彼女の頭が反撃に躍り出た。

「・・・っっ！」

その美しいシルバールブอนด์には似つかわしくない頭突きというキュートな反撃を頂いた玖瑠斗が、ベッドに倒れこむ。

ああ痛い。鼻血出てないだろうな。見ろ、俺のセクシーでキュートな鼻が真っ赤じゃないか。これじゃあまるでナイスガイなトナカイだ。

と玖瑠斗が一通り騒ぐ間に彼女はさっさと身支度を整えたらしい。女の仕度は時間がかかる。経験上でもそれを知ってはいる玖瑠斗だったが、どうやら彼女はそれとは正反対らしい。

髪を手で撫で付け、床に散乱していた下着を身に着け、服を着て身支度終了な彼女を見てそう思わされた。

「さて、わたしはそろそろ行くわ」

「何だ、もうそんな時間か」

無駄なことに相当な時間を使っていたらしい。

朝日も昇り、鳥は囀り、けどやっぱり寒いのは変わらずに玖瑠斗はようやく動き出す。

寒い死ぬ死ぬと言いながら、これまた床に散乱していた下着を穿こうとするが、どうせならと玖瑠斗はシャワーを浴びに浴室へと向かう。

今日は珍しく特に予定のない玖瑠斗を忌々しそうに見送りながら、思いついたように女は玖瑠斗のタバコを1本抜き去っていく。

玖瑠斗が風呂上りに喫煙するのを好んでいるのを知っているからだ。さて、風呂上りに残っていた筈のタバコがないのを見てどんな反応をするのか。

嬉々として仕事へ向かう女を見送りもせず、シャワーを全開に浴びている玖瑠斗もまた思い出したようにポツリと呟く。

「そつえば、あいつ名前なんていうんだ？」

別にベッドで愛を囁かれないなどと乙女チックなキャラにも見えず、そのままだったが・・・まあいいか、と思考をほっぽりだす。

ついでとばかりに、彼女のことなど全てを頭からたたき出してしま

う。

何よりも自分の好みの『しがらみもけんみもない女』を体現したかのような奴だったから。

そう演じるように言われたのだろう。

さて、一体どこの国が誘い込もうとしてるのか。

考えたところでわかりはしない。

何しろ、世界で始めて『ISのような物』を操縦した男なのだから。

第1話（前書き）

実は本編はまだ始まらないという段。

第1話

知らない天井だ。

いったい何度呟いたか解らない事を今日も繰り返しながら、彼は目を覚ました。

外を見る。太陽は既に登り、窓からは自己主張するかのように日差しが差し込んでいた。

カーテンすらする事なく眠っていたせいで遠慮もなく人の家に不法侵入するそれを、うっとおしそうに手で遮る。

人の家とは言っても、自分の家ではないのだが。

「・・・寒い」

眠りに着く前はあつたはずの温もりが消えていることに気づき、自分ひとりしかない空間に寂しさを覚えるような男なわけがなく寝ぼけた頭を覚醒させるためにタバコを啜え、深く深く、灰を一杯に満たすようにニコチンを送り込む。

そんなことを2、3度と繰り返してるうちに徐々に頭は冴えてゆき、そしてどうやら昨晚の恋人は家庭的な女性だったらしいと彼に思わせた。

彼の視線の先。

テーブルを見やると正に日本の食卓とも言つべき品の数々。それもちょっと手の込んだ。

魚の塩焼き。小鉢に盛りつけられた少量のサラダ。味噌汁と白米。

『温めなおして食べてね』と女らしい妙に丸い字で書かれたメモ書

き。

ほう、と感心と併せて煙を吐いた。

部屋には可愛らしいぬいぐるみが見受けられ、ベッドなんて天蓋付きだ。

その他にはろくに家具もなく、壁は真っ白なせいもあり、ベッド回りだけ別世界のよう。

やる事もやった上にあれだけ乱れておいて作る朝食は大和撫子気取りか、とそのセンスの無さに感心してしまっても無理はない。

ひとしきり笑った彼はベッドより起き上がり、彼女の用意したネタとしか思えない朝食を食べる事にした。

温め直すなんて面倒な事をするつもりもなく、冷めた味噌汁を冷めた白米にぶっかけ、冷めた魚の身をほぐし、それもそのままぶっかける。

茶漬けか何かと勘違いしたとしか思えないが、流し込むように口に入れる彼はきつと味など分かっていないだろう。

サラダ？ そんなものは食べなくても死にはしない。

「ふむ、ところで …… ずいぶんとしつこい電話だな」

部屋に置かれた無機質な銀色の時計を見れば、まだ6:30になっていない。

もちろん、彼は早起きは三文の得なんて全く無縁な話だ。

当然、そうなれば彼がこんな時間に目覚めたのには理由があった。彼の安眠を妨げるのはいつだって美女か美少女か頭の悪いビッチか、

無機質な音で存在を知らせる電話だ。

「ああ・・・どこの誰かは知らないがずいぶんとしつこいじゃないか？ お前は俺のファンか？」

そうなら相手は美人に違いない、とにやける顔を隠しながら電話に出る。

驚いたことに、電話は電話でもテレビ電話だった。

「このばか者！ 今どこにいる！！」

しかも、狭い画面いっぱいに映ったのは美女では在ったがかなり気が強いようだった。

しかし、気の強い女というのも彼の大好物なので問題はない。むしろ問題はそのクールで出るところは出ていて引つ込むところは引つ込んでいるボンツ・キュツ・ボンツの鏡のような彼女がなぜだか酷くご立腹のようだ。

思わず今日デートの約束でもしていただろうかと脳内で反芻してしまっが、記憶を掘れども掘れども出てくる気配はない。

何より最後に話したのは1月と半月ほど前だ。

「今日が何日か、言ってみろ！」

『お?』と言われるがままに思考の海へダイブ。
思えばイロイロあった一月半だった。いやまあ、イロイロあるのはいつもの事だが。

しかし、はてさて。いったい今日は何日なのだろうか。

美女との約束も美少女との約束も頭の悪いビッチとの約束も清楚で可憐なお嬢様だがベッドではやっぱり頭の悪いビッチだった女との約束もない日付不明の今日に、いったい何をそれだけ怒っているのか。

「悪い、全くわからない」

むしろそれだけ怒る事の出来る今日という日の価値を早く教えてくれ、とばかりに液晶に移る10センチもない彼女へ告げる。

「ああ、そうだろうな！ そうだろうと思ったよ！」

どうやら今日の彼女はヒステリーがマイブームのようだ。

そうであるなら、全女性かつこ俺のようなガラスのハートにはツンデレのツンを受け止める事は出来ないので、ツンデレは除くかつこ閉じ、の味方である俺は器の広さを見せるしかない。

まあ落ちつけ、と新しいタバコに火をつけながら彼女を優しくたしなめる。

せっかくの美しい顔が台無しじゃないか。

宇宙一美しいだろう美貌が地球一になっちまう、と自分で言うてお

いてそれでも彼女は地球一美しい事実に驚いた表情を見せる彼。まあ、彼が『宇宙一美しい』『地球一美しい』と言う相手は日によって変わるが。

それなりに付き合いの長い彼女はそれがわかつているのだろう。彼のその言葉で幾分か落ち着いた様子を見れば、明らかだった。

全くお前という奴は、と額に手を当てながら彼女が呟く。

最近、何かとても疲れたことがあったのかもしれない。可愛そうに。

「今日はIS学園の入学式だ」

疲れる出来事の原因は俺だったらしい。

「もちろん知っていたさ」

しかし、そこで素直に認めないのが俺クオリティー。

「ほお？　ところで後1時間もしないうちに式が始まるんだが、もちろん間に合うんだらうな？」

「ああ、俺も今出るところだったんだ」

見ろよこの一張羅を、と彼は両手を広げてみせる。

『さすがに入学式なんて一大行事に着ていけるようなシヤレてる服は少なくてな』 『なんだ、制服でよかったのか？ はは、それならそうと言ってくれよ』 と一頻り彼が1人で話し終わってから、画面の向こうの美人さんが冷たく一言で切り捨てた。

「早く服を着ろ」

彼は例のごとく、全裸だった。全裸のままテレビ回線を繋いでいた。たぶん角度的に上半身しか映っていないだろうからアレは見えていないだろうが、それでも礼儀的にどうよと言った感じだ。彼は礼儀とは無縁な気がするが。

「イエッサー、Miss Tihuyu」

無駄に綺麗な発音で締めくくるも、視線は一向に暖かくなならない。このままでは風邪を引いてしまいそうだ。

年上のクールな美人に露出した上に冷たい視線を向けられるなんて、そういった趣味の奴からすればたまらないのだろうが、生憎と俺はMよりかSよりだ。というかSだ。

ナニか文章にするのがはばかれる立派なモノをブラブラさせながら、彼は昨晚の恋人がやっておいでくれたのだろう。

ベッド下に綺麗にたたまれた着替え。その一番上にあるボクサーパンツを身に着ける。

やはりトランクスよりかボクサーだな。こう、気もアレも引き締ま

る感じがいい。ブリーフ？ 悪いな俺はブリーフは認めないんだ、と現在は地球1美しい状態の千冬と（一方的に）会話をしながら、ぱっぱっぱと着替えを済ませる。

「どうだ千冬、完璧な着こなしたろう？」

「ああ、ズボンさえ穿けば完璧だよ」

「今、穿こうと思ってた」

スラックスに足を通し、タバコと財布をポケットに入れていく。

やれやれと落ち着いた様子で、今度は宇宙1美しい状態になった千冬嬢と短く別れの言葉を交わし通信を切ると、その携帯もポケットに。薄型なのでスラックスの形を崩すこともなく滑り込んだのを、どこことなく満足そうな表情で見ると、そのまま部屋を出て

また戻ってきた。

「おっと、こいつを忘れたら俺はまるつきりイラナイ子じゃないか」

着替えをしている内に蹴ってしまったのか。

妙に機械染みたライターをベッド下から救出すると、それを胸ポケットのタバコと一緒に入れる。

ふと、思いついたように棚から棒状のビスケットぱいのにチョコをコーティングしたあれを取り出す。

これぐらいなら文句は言われまいと、1本食べながら携帯で短縮番

号の1番にかける。

「ああ、俺だ。1台車を回してくれ」

そう言い、そのまま玄関を開ければそこには既にピアノのように磨き上げられた黒塗りの車。

愛も変わらず、魔法みたいな電話番号だなと思うが、そんなことはどうでもいい。

「どこまでですか？」

そう尋ねる比較的若い運転手に、俺は両手を広げて今の姿をアピールしてやった。

「なるべく急い・・・なるべく安全に快適な運転で頼む」

もうどうしても間に合うことはないな。

彼はそう開き直すことにした。

第2話（前書き）

凄い地震があった。

震度4～5クラスだったらしい。

ぐらぐら揺れる家。マナーモードのままテーブルに置かれた携帯よろしく、ついに自動移動機能に目覚めた我がノートPC。

さすがに基本はクール。でもやっぱりお笑いキャラと言われる俺も焦ったんだ。
だから俺は

へ（・A・）へ

／ —

あらぶる鷹のポーズを決め、バランス感覚を鍛えていた（実話です）
だってそんなシャレにならないレベルの自信なんて知らなかったんだもの……。

第2話

少年、織斑一夏は酷く困っていた。

高校の入学式がすんだ早々、何を言っているのかと思う人がいるのかもしれない。

しかし、そう思ってしまったてもしょうがない理由が彼にはあったのだ。

真ん中&最前列という最悪の場所である座席もどうでもいい。

自分の直ぐ隣の席が何故か空席のままなのもどうでもいい。

まだ、自己紹介をしたただけだと言うのに、汗を吸い気持ち悪い肌着も、出席簿で殴られた頭が痛いのもどうでもいい。

なんなら、職業不明だった自分の姉が、こんな所で教師をしていたことが発覚したのも・・・まあ、今は置いておこう。

が、とりあえずその程度には広い心を持っている一夏にも、1つどうにかしてほしいことがあった。

横目で左をしてみる。そのまま、自分に向かっていている視線のどれとも合わないように、細心の注意を払いながらなるべく後ろまで見渡し。

続いて同じように右を見て、右後ろを見て・・・ 実の姉であり担任教師でもある女性に頭部を再び出席簿で殴られ。

そんな代価を払いながらも確認してみたが、やはり自分の希望は何1つ叶ってはいない。

「・・・はあ・・・」

自分以外、全て女性という異様な状態が、何度確認しても変わらないことに小さくため息をついた。

しかも、困ったことに自分以外が全て女性というのはこの教室だけというわけではない。

そうであつたら、生徒の振り分け担当の教師を、彼は襲わなくては いけなかつたろう。

何しろ、今、織斑一夏のいる公立IS学園は、自分以外が全て女性なのだから。

本来、女性にしか反応しない（筈だった）ISを起動させてしまったことから、彼の人生はどうにもおかしい方向へ狂い始めたようだ。つまり彼、織斑一夏はここIS学園に、世界で唯一の真正正銘、女にしか反応しないはずのISを起動できる男として在学していた。というか、させられていた。

当然、本来は女性にしか反応しないISの知識および操作を学ぶ場所、自分が世界で唯一のISを起動できる男となれば状況は自ずとこうなるのだろう。

頭の中の冷静な部分が妙に冷めた思考をする中、彼はこれからの3年間に気が重くなった。

自分を除いた、全ての女子生徒から見られているのを、体全体に突き刺さる視線から感じ取ると、思わず頭を抱えて振り回したくなった。もしくは床をゴロゴロと転がりたくなった。

が、そんなことをしたら、学園唯一の男子な上に変人なレッテルまで貼られ、卒業まで『友達1人はできるかな?』状態だ。ので、頭を抱えるのは止め、額に手を当てるだけに留めた。

「ああ、お前たちに1つ伝えておくことがあったな」

弟がこれからの生活に早くも疲労を感じているというのに、そんなことは自分で何とかしろとスパルタ精神MAXな姉の言葉に一夏だけでなく、クラス全員が視線を向け　　ることは無かったが、意識は姉に向いたようで穴が開くほど食い入るようなという視線ではなくなる。

たったそれだけで異様なほど軽くなった両肩に、安心半分、驚き半分だ。

きつと、そんな視線を毎日常時向けられていたら、自分の身より先に胃に穴が開くだろう。笑えない話だ。

「気になっている者もいるだろうが、見ての通りばか者が1名遅れている」

そう言つて、一夏の隣の席を僅かに細まった、厳しい視線で見る千冬。

自分の姉の担当するクラスで遅刻するなんて、なんて勇気のある奴なんだと思わずその誰かに十字を切りたくなる。

そんなことをしたら、また一夏の頭には出席簿が直撃するだろうが。

「おいおい、お前みたいないい女に『ばか者』なんて言われたら、俺はきつと立ち直れない。なあ、千冬？」

そんなことを考えていた一夏にとって、その出会いはあまりに唐突

で、頭が追いつかなかった。

黒髪黒目。整った顔立ちで十分モテそうな容姿だが妙に軽薄そうな笑みを浮かべながら、1人がいつの間にか教室の扉を開けそこに立っていた。

その姿は見紛うことなど無い。

知り合いではない。見たことも無い。

が、重要なのはそんなことではない。そんなことはどうでもいい。しかし、その姿は一夏にとって、確かに望んだものであった。

「・・・男？」

着崩されてはいるものの、その制服は間違いなく自分と同じ男子用。嫌味ではなく、むしろセンスの良い崩し方に、自分もしてみようかと思いの隅を掠めたが、きっとアレは自分がやっても似合わないだろう。

あの男がやるから、自信とともに着れるから絵になるのであって、自分がやっても流行に乗ろうと頑張ってみた冴えない男の出来上がりだろう。

「随分と遅かったじゃないか。確か、入学式には間に合うといっていたはずだが？」

「ああ、道が込んでたんだ」

扉を閉め、スタスタと歩きながら気にしたふうでもなく、事情の知

らない者でも何となく理解できるほど男は解りやすい嘘を吐いた。

「おっと！ 危ないな、千冬？」

「織斑先生と呼べ、ばか者」

「オーライ、千冬」

その男は軽薄そうな笑みを崩すことなく俺の前に立ち、どうやら知り合いのような千冬姉もやれやれといった様子。

もう一夏には、全くとっていいほど視線は向いていない。クラス全員が今目の前にいる男へと視線を向けているからだ。

かく言う、一夏もその例に漏れなかった。

自分は1度も避けたことの無いその一撃を、1度目の不意打ちは避け、2度目は解かっていたように容易に2本指で受け止めた目の前の男に。

「ああ、お前が一夏か？ 千冬から話は聞いてるよ。この学園で・・・
・と言うか、この業界で数少ない男同士、3年間よろしくな」

「あ、ああ。よろしくな。えっと・・・？」

「黒峰 玖瑠斗、くるとでいい。な、一夏？」

一瞬、彼の表情が変わったようにも見えたのだが、今の様子を見るに気のせいのような。

指で押さえていた出席簿をあつさりとしきりと離すと、未だ軽薄そうな笑みのまま玖瑠斗は一夏へ手を差し出す。

握手、ということに気づくのにしばらくかかったが、それに答えるように一夏はその手をしっかりと握った。

この学園に来てくれてマジありがとう、いやマジでと思いをこめて。

良かった、どうやら『友達1人は出来るかな?』は何とかなりそうだ。それもありえないと思っていた男友達。

今なら信じてもない神様に感謝できそうなら良かったが、そもそもここにすることがその神の悪戯によるものだとなっているのだろうか。いや、たぶん忘れてるのだろうか。

それぐらいに、一夏は舞い上がっていた。

あり得ないと思っていたものが、目の前に現れたのだ。その振り幅といえば、凄まじいものがあるのだろう。

玖瑠斗にしてみれば男に求められるなど、死んでもゴメンだろうが・
・。

「くると君？」

「お？」

妙に熱く固く握られた手を苦笑しつつ
きていつそ不快そうに見ていた玖瑠斗。

いや、段々と汗ばんで
そんな彼を、どこか子どもらしい、しっかりと名前を呼ばれてはいるのだが漢字変換されない、平仮名のような発音の声。

美しいよりも愛らしいという方が似合うその声は、しかし確かに聞

き覚えがあつた。

「何やってるんだ、真耶？」

「せ、先生を呼び捨てにしちゃダメです！」

「ああわかつたよ真耶。で、何で私服なんだ？」

「うう・・・絶対わかつてないよね？」

小さい体を一杯に使い、少しばかり厳しい視線に人差し指を立て「めっ！」と注意して　　してるつもりなのだろう、本人は。しかし、その仕草もまた愛らしいとしか映らず、千冬の注意すら無視する玖瑠斗に効くはずもないのは当然とも言えた。そんな玖瑠斗は問いかけは同じ内容でありながら、ひたすら一点を見ていた。

目の前に立つ山田真耶せんせい。

『私、中学生です』と言われても納得してしまうような幼い顔立ち。たぶん、生徒達と比べてもほとんど変わらない身長。

明らかにサイズの合っていないだぼとした服。

変わっていないな、といっそ安心感を覚えながらも、玖瑠斗の視線は一切揺らがない、外れない。

例えばだ。

すぐく身近にいる・・・というか、すぐ後ろにいる千冬がボンツ・キュッ・ボンツとするなら、目の前の至高の一品はそれを軽く凌駕していた。言うなれば、それはドウォンツ・キュッ・ボンツだ。

わかるか？ 『ボン！』 じゃない、『ドウオン！』 だ。神の卸した奇跡だ。

それが、彼女がオーバーアクション気味に腕を振るい、飛びはねるように体を振るう度に・・・たゆんたゆんと。

もぎゅ

「相変わらず立派・・・いや、またデカくなったか？」

「つ・・・！！！！？」

「俺がいなくてもちゃんと育ってたんだな。感心し」

思わず、といった調子でその神乳を揉みしだく。

満足そうに頷く玖瑠斗は、まるで娘の成長を嬉しく思う父親のようであった。乳親ではない、断じて。

微笑ましそうに溢れる笑みを隠す事なく、マシユマロのようなソレを弄んでいると 顔を真っ赤にした真耶が・・・とても潤んだ目でこちらを見ていることに気づいた。

ニヤリ、と思わず頬を吊り上げると、ビクリと反応しながらもほおつとナニかを待ち望んでいるかのように薄く開かれた艶っぽい唇から吐息が漏れる。

このままこれだけの人数に見せつけながら行為に及べば、真耶はいったいどれだけ良い反応を返してくれるだろうか。

自分の中でS気という名の黒く邪まな欲望が鎌首を上げているのを

感じながら、彼女の胸元へ手を滑り込ませ
耶を襲うかのように抱きしめた。

ようとして真

いや、それだけでなく、そのまま体を反転し黒いパネルに背を預けた。

というのも全ては

「お前は・・・初日から遅刻しただけでは飽き足らずに、クラスメイトの前で何をしようとしている」

俺のいた場所を、高速で必殺の出席簿が切り裂いたからだ。

「従順な子猫にはご褒美をあげるのが、俺の主義でね」

「子猫か。山田先生はお前より年上だったはずだが？」

「お姫様にはご褒美をあげるのが俺の趣味でね」

「あうううう！？」

ヒュッと大気を切り裂く音を立てて放たれた一閃を、俺は再び避ける。胸元に抱き込んだままの真耶と一緒に。

それでも真耶は悲鳴まで幼く感じられてしまうのはどうなのだろうか、と全く関係ないことを考えている辺り、俺の頭は随分とおかしい作りになっているらしい。

「おいおい、振り下ろしならともかく、薙ぐのは反則じゃないか？」

「ほお、まだ腕の中にいるとはずいぶんとお暑いな？」

「……え？…あ！ ダメですよ！？ 私は教師で、くると君は生徒で…えっと、その別に嫌ではないんですけど、その世間体というものが…」

千冬の冷たい言葉を受けて、俺の胸にすがりつく様に手を添えていた真耶が思い出したかのように慌てだす。

それでも、俺を押し離すでもなく、暴れだすでもなく、とにかく真っ赤な顔であれこれと言っている辺り、彼女の思いが伺える。というか、彼女の言葉から伺える。

しかし、いい加減にしないとそろそろ千冬が我慢の限界のようだ。

引き際ぐらいは心得ている。長く長くこの世界に浸ってきた彼が得た、副産物的なものの1つだと思ってもいい。

何処か…ホテルか自宅なら、ここから彼女にナニをして欲しいか言わせていただろうが…。ついでに言えば、恥じらいながら濡れた唇から言葉が紡がれるのを、俺は酷く加虐的な笑みを浮かべながら見ていたのだろうが。

『うん、待てよ』と、ふと頭に何かが引つ掛かる。

先ほどまでの俺のＩＦ予想図でもなく、何か特大の爆弾を聞き逃した気分だった。

俺が聞き逃したほどだから命には関わらないのだろうが、それでも気にはなるのだ。こういうのは特に。

「・・・・・・・・せん・せい、だと？」

「え、はい？ どうしたんですか、くると君？」

「・・・・・・・・どうにも、今日の俺の耳は酷く不調らしい。だから確認したいんだが、お前は自分を先生と言ったのか、真耶？」

「???? 私はこのクラスの副担任ですよ？」

「・・・・・・・・どうにも俺の聞き間違いではないらしい。
しかし、はてさて。いったいどうなっているのか。と、考えること
数秒。」

「　　どうにも女は美しくなるのも早ければ、たった数年で冗談ま
で言えるようになるらしいな。ただ、冗談にしては少しばかりたち
が悪い。そう思わないか、千冬？」

「副担任で間違いない。私も山田先生と言っているだろう」

全て彼女の冗談、ということ片付けた。

そして、この名推理が間違っていないことを千冬に確認してみたも
の、その答えは望んだものではない。

が、千冬が言うからには真実なのだろう。有能さと美貌と引き換え
に、冗談のセンスを売り払ったような性格の彼女だ。おふざけでも、
こんなことには参加も協力もしない。

「ああ・・・知らないうちに、日本は労働基準法を改定したのか？」

「そもそもIS学園はISの操作ができるものを優先的に雇用している。それに、山田先生は就労可能な年齢だが？」

「そつえば、確かさつき千冬が真耶のことを俺より年上と言っていた気もしないでもない。」

「さつきり聞き流していたが、まさかこの山田真耶が俺より年上などと誰が考えようか。」

「・・・まさか、真耶。俺より年上だったのは冗談じゃなかったのか？」

「私、前に言つたじゃないですか！」

「ああ・・・ちよつとばかり大人に見られたい、思春期ゆえの冗談だとばかり・・・」

「酷いです!？」

涙目で胸元をポカポカ叩く真耶に、苦笑を溢す玖瑠斗。

数年前にこんな伏線を仕込まれていたとは、と当時の自分を殴りたくなった。年上なら、もっとやってしまっても良かったんじゃないだろうか、と。

「で、お前はいつまで私を待たせるつもりだ？」

「ハハ、まあ久しぶりの再開だったんだ。これぐらい許してくれ」

「私のときはしない反応ばかりだったが」

「しつて」

ギラン、と効果音が聞こえるかのような鋭い視線に言葉を飲み込み、肩を竦める。

『このブラコンめ』と言いたくなかったが、後が怖いのでやめておいた。何より、このIS学園では彼女のほうが上位だ。何をされるかわかったものじゃない。

ここは従順に頷いて、奴隷のように従うのが吉だろう。たぶん。

その直感の元、彼はくるりと体ごと、これから暫くの時を共に過ごすクラスメイト達に向き直る。

順番は随分とおかしいが、まあ最初ぐらいはちゃんとしておこうか。
・・・今更かもだが。

「さて、聞こえてたかもしれないが黒峰 玖瑠斗だ。これからよろしく」

しばしの沈黙。

そして沈黙。

再度、沈黙。

「キヤー本物！？ 本物なの！？」

「玖瑠斗様！？ 生玖瑠斗様！？」

「サ、サイン！ サインください！！」

結果、飛び交う黄色い声。

『え、さっき自己紹介したよね？』と、時間差でのこの状態に首を傾げる玖瑠斗。

「ひょっとして、自己紹介しないほうが良かったんじゃないか？」

「・・・ああ、そうかもな」

酷く疲れた顔でやれやれと額に手を当てる千冬が印象的だった。

それを横目に、俺は颯爽と席に着いた。一夏の隣へと。

こういうのを押さえる、または沈めるのは俺のような生徒ではなく、彼女のような教師の役目なのだから。

いやはや、俺にその権利がないのが残念でならない。

第3話（前書き）

ある日、職場のPCが突然お亡くなりになった。

未提出のデータの期限を思い返してみる・・・。

「ああ、今月末か」と白煙を吐き出しながら、自嘲気味に呟く俺。
素直に上司に報告し、これからの指示を仰いで見た。

「気張れ（・・）b」

C=C=C=C=C=C（；・）俺

：／（°。 （・C>（／；（；／ イヤアアアアア！！

つまりこんな流れで、更新が遅れたのです。

第3話

「へえ、じゃあ世界各国を転々にしてたのか？」

「ああ。俺の都合なんてお構い無しに呼ぶもんだからな？　IS学園に入学してやった」

『たぶん各国のお偉いさんは絶賛お困り中じゃねえか？』と笑う玖瑠斗の言葉に、同じくケラケラ笑う一夏。

彼がいない事で国の研究がどれだけ滞るかなど、一夏は知らないのだろう。

本来は国に対して少ない数しか割り振られないISコア。ISコアが少なければ機体数も少ない。

そうなれば取れる機体のデータも必然的に限られてくるが、だからこそ彼だ。

あらゆる国で一定の権利・発言を保証される玖瑠斗だが、その裏にあるのは世界各国の後ろ楯。

つまりあらゆる国でISに関するデータを提供する事で、彼はその保証を得ているわけだ。

IS学園に入学されたら、あらゆる国は彼に干渉する事が不可能になる為、彼が卒業するまでどれだけ技術的な開発の遅延が出るかわかったものではない。

技術の発達と言うのは、そのまま経済にも直結するので多方面の者たちにとって決して笑い事ではない内容だが・・・この男は気にしないのだろう。

「ま、どうしても必要になれば話が来るだろうしな。俺の有り難みを解らせるにはちよつと良い」

そもそも『不干涉』と言うのはかなり限られた分野においてだが、適用されない節もある。

多国が試験機を持たせた代表候補生を入学させるように、このIS学園と言うのはISに関するデータを取る場所でもある。

データの為に代表候補生が自国のバックアップを受けるように、『不干涉』と言うのは曖昧でもあった。

携帯は必要時以外は落としてしまっているが、IS学園に話を通せばどうとでもなるだろう。

『必要になれば話が来る』とはそういう意味だ。

「・・・ちよつといいか」

どちらを、と指定する主語がなかったため、反射的に俺と一夏が同時に振り向くが・・・どうやら用事があるのは一夏らしい。

いや、一夏だろう。俺のことなんて彼女は見向きもしないのだから。

なぜか嫌悪感的な、負の感情は伝わってくるというのはとても笑えない。

一夏を呼びかけた上、7こちらなど眼中にないといった態度を見せる彼女のことを、玖瑠斗は知っていた。とは言っても、一方的な知り合いと言った感じだが・・・。

篠ノ之 箒。彼女の名だ。

良く『隠れ家がばれちゃったんだよね』と俺のところに転がり込んでくる天才にして天災。

人類最高の頭脳を持つ、ISの開発者。

篠ノ之 束の妹だ。

本人から、妹自慢を2時間ほどされたので間違いない。

あの人間嫌いと言っても過言ではない彼女が嬉々として話したことに思わず驚愕したことは今でも鮮明に覚えている。

いや、状況がそうさせたのかもしれない。

災を呼ぶとはよく言ったもので、当時の俺の家に転がり込んで来た彼女を追って、アメリカ軍が押し寄せたときにはさすがに焦った湖畔から上陸するSEALs。空を固めるデルタフォース。突入してきたグリーンベレー。

誰でも知ってるようなアメリカ軍の特殊精鋭部隊のエース達が、篠ノ之 束という一人のためにチームを組み、『プロジェクト T A B A N E』というふざけてるのか本気なのか分からない作戦名で捕獲に乗り出したのだ。

あのとき、わけも分からず必死に応戦してアメリカの誇る精鋭の侵攻を押し止めていた俺に対し、あの天災は妹自慢を始めやがった。

俺の心境は『どうしてこうなった』で一杯だったが、それでも忘れるはずがない。

巨乳で日本人らしい黒髪。残ってるはそれぐらいだったが。というより、俺はそれどころじゃなかったのだ。

死ぬときは腹上死と決めていたのに、どこで道を踏み外したんだろうと。

「・・・い・・・る・・・？・・・と！」

「あ？」

「大丈夫か？」

俺の目の前に手をかざした一夏が不思議そうな顔をしている。
どうやら、知らぬ間にどつぷりと回想に浸かってしまったらしい。

「ああ、悪いな。で、どうした？」

「いや、それは俺のセリフなんだけど」

「俺はいいんだよ。で、どうした？」

一夏は気づいていないのだろうが、一夏の後ろのお方が少々キツイ視線を送ってきているのだ。

急かすような、嫌悪交じりの・・・というより、侮蔑交じりの。

「ああ、少し筭と屋上行ってくる」

「ああ、俺は気にしなくていいぞ」

一応、話を遮る形で一夏を連れて行くのだから会釈ぐらいはしてもいいだろうに、箒は全くその気がないらしい。どれだけ嫌われたのだろうか。

公然で少しばかり神乳を堪能したぐらいしか思い当たることはないのだが……。いや、それが原因か。

というか、本当に俺は気にしないで早く行ってくれないだろうか。ハリー！ ハリー！ と急かす彼女の視線が地味なダメージを与えるのだ。それでどうにかなるほど軟かどうかは別問題だが。

「悪いな。なるべく早く戻る」

・・・ああ、また余分なことを、と玖瑠斗は頭を抱えなくなった。

確かに一夏にしてみれば、この群集の中。メスの群れというかコロニーにたった1人のオスという状況を僅かとはいえ体感し、それに苦手意識を持っているようなものだから、同じ男をその状況に放り込むのが心苦しいというのも分かる。

だが。だが、しかし、だ。

散々待たされた拳句にやっと話が出きるかと思えば、今度はその話になるべく早く切り上げると言うのだ。それも彼女にしてみれば、全く知らない男の為に。

自分ではなく、そちらを優先すると話をする前から言われたのだ。

「早くしろ」

「お、おい箒！」

もはや憎悪と呼べるんじゃないかと思えるほどにランクアップもしくはレベルアップした感情を乗せた視線で一瞥された上に、一夏は腕を掴まれ引きづられて行った。

「・・・あいつは苦勞するな、たぶん」

空気の読めなさというか、女心に疎いというか・・・。
対面したのは初めてだが、何となく彼女が一夏のことをどう思っているか、玖瑠斗は察することができたというのに。

むしろ経験豊富な玖瑠斗だからという可能性もあるが、幼馴染なんて親密な関係なのだからそれくらい分かりそうなものだろうと思う。
あれか？ 幼馴染なんて近すぎる関係だからこそ、その先を感じが会えることができないとも言っのか。

「・・・いや、一夏のアレは素だな」

一夏の残念さ加減を悲しく思いながら、特にすることのなくなってしまう玖瑠斗が教室を見渡す。

『ほら、今ならお1人よ！』、と誰が一番に話しかけるか相談する4人組のグループ。俺がクスリと笑えば顔を茹蛸状態にしてぶしゅと湯気を噴出した顔を隠すように机に伏せる者。ついで、余波を受けたのか、胸も前で手を組み頬を染めながら玖瑠斗をぼろっ

と見る者。

見渡しても見渡しても女子、女子、女子。

しかもISという女性ばかりが主導に立つ分野上、IS搭乗者は男と知り合う機会が極端に少ないという環境におかれる。

それを踏まえてもう一度、クラスを見渡してみようか。

するとどうだろう。見渡しても見渡しても、処女、処女、処女。

有名どころは大体が確定。年齢を考えれば、ほぼ全員が処女なのではないだろうか。なんて素晴らしい空間だろうか。

頭の悪いビッチも好きだが、何色にも染まっていない女を、自分に染め上げていくのも一興だ。

それで束縛されるのはごめん被りたいが、愛でる分には可愛いものだ。束縛しなければ、というのは前提条件だが。

「・・・ん？」

美男子の鏡といえるような笑みでなく、純粹に得物ばかりの状況に舌なめずりするような、情欲から緩みそうになる口元を引き締めていると、見渡したクラスの中。

妙に袖の余った制服を着た、なんか小動物チックな印象を受ける少女が、手をパタパタと振っている。俺に向けて。

ついでに、何か言っているらしい。それほど声が大きくないのと、クラス内の喧騒ぶりにかき消されて全く聞こえないが・・・使えてよかった読唇術。

それほど熟達した使い手でもないの少しずつしか読み取れないが、どうやら少女は同じ言葉を紡いでいるようだ。それぐらいは、読唇

術抜きでも口の動きで分かる。

「く……ろ……み……い？ いや、『くろみー』か？」

まさか俺のことか？ いや、十中八九というか間違いなく俺のことだが。

クラスメートの自己紹介で、当然彼女も名乗っていたから名前はわかるが……しかし、そんなあだ名で呼ばれるほどの仲だっただろうか。

ほんわかな癒し系の雰囲気を纏い、可愛いティーンとなれば一度でも会えば忘れない筈だが……代わりに、会う男共を脳内から消し去りメモリーを確保しているから間違いない。

携帯のアドレス張に、つい先ほど登録された一夏を入れても未だに男のアドレスは片手で足りてしまうと言うのが全てを物語っていた。総数は裕に3桁を超えと言うのに。

「まさか俺のファンか？」

最近、口癖になっていんじゃないだろうかと本気で気にしている言葉を発しながら、手を振り替えず玖瑠斗。

……手を振る少女に手を振り返す玖瑠斗。

……手を振る少女に手を振り返す玖瑠斗。

「…………手を振る少女に手を振り返す玖瑠斗。」

「いや、長い」

冷静に突っ込んでみたところで状況は変わらず、未だ手を振り続ける少女。

「何をしている」

「……俺にもわからない、千冬」

いつまで続くんだだろうか、と。いや、俺が振るのを止めれば終わるんだろうが、なんとなく俺から止めるといふのは気が進まない。終わりの見えないまま延々と続けていた玖瑠斗だったが、背後から呆れ混じりのよく知った声がかかったことで、一応の終結を迎えた。

「織斑先生だ」

「ところで千冬、どうしたんだ」

「授業に決まっているだろう、ばか者」

もはやお決まりともいえる彼女の斬撃という名の出席簿を避ける。来るとわかっていれば、どれほど早かろうと対応は簡単だ。俺がそ

の程度には体術に優れているというのが大きいだろうが・・・。

千冬の言葉に、玖瑠斗は僅かに声を漏らしながら腕時計を見やる。一目で高級だとわかる、シンプルでいて繊細で、上品な装飾の施された時計だ。

玖瑠斗は別に時計に興味があつたなんて話も聞いていないから、どうせ誰かから貢がれたんだろう。

彼を多少なりとも知っている者なら、直ぐにわかることだ。

というより、わかつてしまった。目の前のこの女性、織斑 千冬には。少なくとも、その程度には2人の付き合いは長かったからだ。しかし、軽く千冬の眉が上がるのを、玖瑠斗は見逃していない。

「てつきり、俺にお茶の誘いでも持ってきてくれたのかと期待してたんだけどな」

「・・・・・・・・馬鹿を言っていないで席に着け」

間があつたな。そう思うも揚げ足などは取らない。

「俺が席を立っているように見えるか？ 千冬？」

「・・・・・・・・」

どこことなく教室が冷えた。千冬の後ろの真耶が、しきりに何かを伝えようとする。ボディーランゲージで。

しかし、ソレは全くの無駄だ。俺の視線は、その動作などに向いていない。

俺の視線はひたすら彼女の揺れるその乳だ。固定だ。ロックオンだ。狙い打つぜ、だ。

大きいのはそれだけで素晴らしいと思う。無論、大きいのは正義であり、小さいのも正義だ。もう乳が正義だ。

「ごめん千冬姉！ 遅れ」

「織斑先生だ！ ばか者が！！」

何かを耐えるようにプルプル震えていた千冬。その脇を抜けるように現れた2名。一夏と篠ノ之 篁。

ちらりと玖瑠斗は篠ノ之 篁を見る。なにやら先ほどより表情が柔らかくなっていた。

やるな一夏、と胸の中で口笛を吹いていれば、たぶん自分より先に千冬が教室についていたことに焦ったんだろう。

普段どおりに彼女のことを呼ぶ一夏に、千冬の最後の何かが切れた。

弟であろうと、関係ないぐらいになにか削られていたらしい。

ストレス社会とは、どうしてこうも大変なのだろうかと思いをはせる玖瑠斗。

この学園で唯一の男友達の蒔いた種を回収する一夏。

・・・具体的に言えば、普段の3割ぐらい増しの姉の一撃をその身に受けて言葉も無く悶絶する一夏。

結論。

織斑一夏は女心に疎く、あまり空気も察せないらしい。

可愛そうな奴だな、と同情の念を送りながら、玖瑠斗は結果として耳まで真っ赤にした顔を上げてその愛らしいとすら言える表情を自分にさらした千冬を見てほくそ笑んでいた。

第4話（前書き）

ごめんなさいとしか言えない。

ただ1つ。

ブランクばねえ（、・・・）キリ

第4話

メインが真耶、サブで千冬という、何とも華のある授業ではあったが、玖瑠斗は当然のように興味を示さない。

簡略に言えば、2時間目をさっくりと睡眠学習に当てた。

しょうがないのだ、どうにも昨晚の恋人は人使いが荒かったのだから。

たびたび起床させようと襲い来る出席簿を、寝ぼけながら防いでいく様を見て、一夏が英雄を見るかのようにだったのは、まあ関係ない話だ。本当に。

「ちょっとよろしくて」

玖瑠斗を眠りから覚ましたのは、そんなどうでもいい女の声だった。

しかもそのまま、横でぎゃあぎゃああと騒ぐものだから、そのまま再びまどろみに身をゆだねることも出来やしない。

「・・・おい一夏、眠れる森の美女がどうやって眠りから覚めたかお前は知ってるか？ キスだ。俺は男だが、出来ればこんなどうでもいい声で起こされるぐらいならキスのほうがいい。お前もわかるだろう？ わかったなら今度からは飛びっきりの美女を用意してくれ」

眠気を振り払うように軽く頭を振るうと、視界に収めた一夏を諭す。それはまるでダメな息子に語りかける親のようだ。この世では至極当然なことを、まだまだ世の中を知らない息子に語りかけるような、自愛に満ちた親のソレだ。

「いや、俺にも何がなんだか・・・」

「どうせ昔に引つ掛けた女との痴情のもつれだろ？」

「そんなわけないだろ！」

大丈夫、俺はわかってるからと頷く玖瑠斗に、変な誤解をされてはたまらないと一夏が吼える。

実にいいレスポンスだ。芸人になれるだろう。

一夏の特異性は、そんな自由を得られるほど軽いものではないだろうが。

「あなたも、あなたですわ！」

そしてなぜか矛先が玖瑠斗へ。

ここでやっと玖瑠斗は一夏から、無駄に賑やかな少女へと視線を移す。

美しいブロンドの髪だ。素直にそう思った。
そう言えば彼女もブロンドだったか、と脳裏に一週間ほど前に世話

になった女がふと蘇る。

とは言っても彼女は珍しいストロベリー・ブロンドだった。名前は確かキャシーだったか。いや、メアリーだったか。語尾を延ばすのは間違いない。なんの救いにもならないが。

「聞いていますの!？」

目の前の少女は、白人特有の透き通ったブルーの瞳を吊り上げてこちらを見ている。というか睨み付けている。

緩いウェーブを描く髪が優雅で、気品にあふれていた。

ISというものが発明されてから、女性とは存在そのものが優遇されている。

女尊男卑。今の世の中を表すのに、これほど適した言葉はないだろう。

男は単なる労働力。女は無条件に偉い。

今では政府官僚までが、次々と世代交代と称され入れ替わっている。今では女性議員はISが生まれる前の2倍以上だろう。

そうなれば、単純に考えても女性有利の法を却下することなんて出来るはずもなく、今をもつてますますその波は収まることを知らないというのが現状だ。

『女は偉い』

なるほど確かに今の世にとっては正しく真理だ。

「ああ、何だセシリア・オルコット」

「知ってるのか？」

「ああ、イギリスの代表候補生だからな」

そんな俺と一夏の会話を、上から見下ろしているセシリア。
文字通り見下したその態度が酷く神経を逆なでする。

「あ、悪い。1つ聞いていいか？」

「ふん。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

『いや、お前に言ったんじゃないだろう』と内心で思う玖瑠斗だったが、一夏にしてみれば答えてもらえれば誰でもいい内容だったのだろう。

しかし、一夏の質問の後、よくやったと俺は一夏を褒めちぎりたくなってしまった。

それに俺は笑っていたので、質問になど答えられなかったらう。

「代表候補生って、何？」

「あ、あ、あ………」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

淑女としてあるまじき形相で、一夏に詰め寄るセシリア。

当然とでも言うかのような一夏の反応も加わって、玖瑠斗は笑いすぎて死にそうだった。

ぐるっと一周していつそ冷静になったセシリアと違い、中途半端に笑いを堪えたせいで喉を鳴らすような音を溢し続けている。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていきましたけど、期待はズレですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「そもそも『世界で唯一男でISを動かせる』一夏の希少性からして、試験に落とすわけがない。誰が考えても分かることだ」

ISの適正という才と呼ぶほかない項目に加え、試験でも裕に2桁年によつては3桁の倍率で篩いに掛けられるのだから、専門知識を有していなかった一夏が受かるはずはない。

正々堂々と裏口入学したとでも言おうか。

そうなれば、各国も一夏を独占する事はできなくとも、データに限れば無償の提供が保障されるのだから文句も出ない。

そう考えた時、セシリアはどうなのだろうか。

もちろん彼女は試験を受け、しっかりと合格を貰いここにいるわけ

だ。

つまり、暗に玖瑠斗はこう言っているのだ。

『ただの代表候補生のお前よりも、あらゆる国が一夏を重要視している』、と。

「ふ、ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

怒りか、羞恥か。

もしくは両方かもしれないが、ブルブルと体を震わせながらも優位に立とうとするのは、もはやお見事というほかない。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

これが優しさなら世界は随分と優しさに満ちていることになるな、と妙に皮肉ったことを思う一夏。

そうだ、ストロベリー・ブロンドの彼女はジェニーだ、と笑いすぎたおかげで名前を思い出した玖瑠斗。

……どうでもいいが、本当に末尾を延ばすところしか合っていないかった。あと、文字数か。

だが、一夏が何かに引つ掛かったようで『ん？』と首を傾げた。男がやっても全く可愛くないので止めて欲しい。

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

それが自信を高めこの態度をとるのに1役買っていたのか。

それが否定されたあまりの驚愕に、目は見開かれ、口からは間拔けな声が漏れる。

ついさっき同じような状態に陥ったばかりの彼女が、またもやブルブルしだしたのを見て『なるほど。きっと彼女は5分に1回ブルブルしてしまう、なにか発作的なものをかかえているんだろうな』と心の中でお悔やみ申し上げる一夏。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子だけってオチじゃないか？」

一夏の一切飾らず、一切媚びず、一切引かない遠慮のないツツコミを受けたセシリアが硬直した。ブルブル震えもしない。

ピシリッ。氷のひびが入ったような、そんな感じの効果音が聞こえたぐらいだ。

が、どうやら彼女もなかなか強情なようだ。というか、完全に引き際を失っているだけかもしれない。

これだけ言うこと言うこと空振っていけばしょうがないのかもしれないが。

「あ、あなたはどんなんですの!？」

なぜかセシリアの標的が玖瑠斗に変わった。

ズビシッと指さしながら、息を荒くして問いかける様子を見るに、気品は何処かへお出かけしてしまったらしい。

「バカ言つな、専用機も使わないで勝てるわけがない。引き分けが精一杯だ」

「・・・なぜ専用機に乗らなかったのですの？」

「そういうルールだ・・・」

「・・・ろ？」と続けようとして謀られたか、と彼がそういう結論に至るのは早かった。

何よりセシリアは冗談を言っているようには見えないし、それは玖瑠斗も不思議に思っていたことだったからだ。

専用機持ちというのは国家代表候補制の中でも特に選り抜かれた存在と言っている。

つまり、IS学園としては万が一にも試験に落ちるなんてことがあつてはならない。もしくは、回避しなければならない。

試験官と試験の受講者に多少なりとも搭乗経験の差があつたとしても、専用機のスペックと汎用型のISのスペックはその差を埋めるには十分すぎる。

そして、玖瑠斗だけが試験会場がIS学園のアリーナであったこと。無理やりねじ込んだ形であったからそうなのだろうかと思いましたが、しかし合格もしていないものをIS学園に入れるだろうか。

今まで頭の隅に引つかかって、もやもやしていたものがピタリとハマった気がした。最悪な形で。

「やりやがったな、千冬」

「な、まさか！　あなたが引き分けた試験官というのは織斑先生なんですの！？」

「量産型IS同士とはいえ、俺と引き分ける相手がそうそういるか」

IS搭乗時間ならISの開発当初から搭乗していた千冬にだって負けない玖瑠斗を、量産型IS同士の同スペックでの戦闘とはいえ、引き分けに持ち込む人間など視野を世界に広げても片手で足りてしまっただろう。

しかも、時間切れとかそういうことなく同士討ちという。互いに攻めきった結果での引き分けなら尚更だ。

「く・・・！」

だがそうは言っても、ここまで露骨に睨まれるのは当然気分がいいわけじゃない。

いや、気分が悪いというのは語弊があるか。

今この時、玖瑠斗の身に湧き上がるのは怒りなどでなく、一種の高揚感に近い何か。

足の先から背筋を這い上り、ぞくぞくとした感覚を刻みながら頭へと流れ込む感情に、すべてをゆだねてしまいたくなる。

それはきつと、とても楽しく、とても愉快で、美しいのだろう。

玖瑠斗は望むがまま、セシリアに手を伸ばそうとして

「っ・・・！ またあとで来ますわ！ 逃げないことね！ 良くって！？」

チャイムの音に我に返る。

最後まで喚いていくセシリアの言葉を拾うことすらせず、頭が冷えていくのを感じながら玖瑠斗は上を見上げた。

「どうしたんだ？」

「ああ、いや。別になんでもない・・・」

馬鹿らしい、と天井を見上げながら口に出さずに自嘲する。

「何を呆けている、黒峰」

千冬の注意を受け、玖瑠斗は視線を前に戻す。

何をするでもなく、ただただ天井を見続ける俺は、酷く間抜けだったんじゃないだろうか。

自身の中に僅かに残る、重く黒くどろどろした感情を吐き出すように、玖瑠斗は1度大きく息を吐いた。

この感情が間違っても溢れてしまうことのないように。

第5話（前書き）

ごめん、クオリティー低くてごめん。

盛り上がり欠けるお話を書くと、どうにも玖瑠斗君はまじめ過ぎますな。

そろそろ、はっちゃけてほしいのお・・・。

第5話

食事を済ませ、まだ半分以上を残した昼休み。

吸い込まれてしまいそうな青い空。ゆつたりと流れ、時を忘れさせる白い雲。

頭上にはそんな雄大な景色が広がるIS学園の屋上。

そこにいるのは、コーヒーを飲みながら黄昏ている一夏。

それをうつとおしそうに見ている玖瑠斗という何とも言えない2人だった。

頭上に広がる景色とアンマッチなことこの上なかった。

「・・・一夏」

「・・・悪い」

屋上のフェンスに寄りかかるように座り、罰が悪そうに頬をかく一夏が、謝罪の変わりとはばかりに売店で買ったポッキーを勧める。もちろん、一夏の驕りだ。ずいぶん安い。しかし、いい選択だ。

というより、別に怒っているわけではない。

ただ直ぐ横で遠い目をされると、うざいのだ。猛烈に。

その意趣返しというわけではないが、一夏には遠くではなく現実を見てもらおうと思う。

「俺はともかく、お前はだいがきついぞ？」

「・・・わかってる」

「専用機と汎用機のスペックの違いと、単純な搭乗時間なんてのはもう比べる必要もないぐらいだ」

「・・・わかってる」

ぽりぽりと次々にポツキーを消費していく中、変わらない調子で玖瑠斗が一夏に辛く厳しく、そして自業自得な現実を突きつける。それをため息をつきながら、コーヒーを飲む一夏がテンション低くうなずき返していた。

「気持ちわかるさ」

「・・・悪かったよ」

何度も言うが、別に玖瑠斗は怒っているわけではない。

というか、一夏が望んでいたとはいえ、今こうなっている事情の何割かは玖瑠斗の責任でもあるので理解があるといった方が正しい。

しかし、時間がたち、やっと頭が冷えてきた一夏がいつそ機械的に謝罪を続けるのを見るのも飽きてきた。

ネガティブ思考に陥った男の傍になど、好き好んでいたくないというのが本音だ。

「まあ、だから勝てないとは言わないけどな」

「わかつ・・・え？」

驚いたようにこちらを見る一夏。

それを見て呆れた様子の玖瑠斗。

お前は勝てないと思う相手に喧嘩を売るのがと。

状況によって、どうしても避けてはいけない場合もあるが、今日ではないだろうと。

そう思っても何一つ言わないのは、玖瑠斗の優しさと、9割の呆れだ。

驚きから1点して。

やはり負けたくないのだろう。キラキラとウザイことこの上ない目を向ける一夏に、『さて、どうしたものか』と声に出さずに思考する玖瑠斗は口内のチョコをコーヒーで流し込み、ほんの2時間前の出来事を反芻していった。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

3時間目の授業前。クラスのリーダーを決めると千冬が話したときのこと。

1人の女子が、明らかにノリだけで一夏を推薦したのが始まりだった。

悪乗りする女子が更に一夏に票を集め、「ちょっと待ってくれ」と一夏が口を挟む間すらなく、一夏に票が入っていく。

「はいっ。私は黒峰君を推薦します!」

「玖瑠斗様! はい、私も玖瑠斗様を推薦します!」

貴重な男子とはいえ、なぜわざわざクラス委員のような面倒なことをしなければいけないのか。

確かに実力から言えば玖瑠斗が推薦されるのは至極当然なのだが、彼の本来の実力を彼女たちが知っているわけではない。

彼が世界中で“ISもどき”のデータを提供しているのは周知の事実だが、彼本来の純粋な戦闘力というのは知られていない。

それは一重に彼が本気というのを見せないからというのもあるし、提供されたデータの恩恵を受ける各国代表たちが言いふらすこともないというのがある。

そう考えると、玖瑠斗を推す彼女たちも一夏を推す者達と同じく悪ノリなのだろう。

「待ってください! 納得がいきませんわ!」

であれば、こういうバカが騒ぎ立てるのは目に見えている。

ついさきほど絡んできたセシリアを、見ることもすらく玖瑠斗は煩わしいというのを態度で示していた。

ああ、言い返したいところではあるが、このまま黙っていればクラス委員などとふざけたものに関わらなくていいのだ。

ああ、口がさびしいな。タバコを吸いたい、と内心で毒づくことで憂さを晴らしていたわけだが、一夏のほうはそこまで大人でなかったらしい。同年だが。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ・・・・・・・・!？」

正しい。正しいがお前はバカか、と玖瑠斗が思わずため息をつく。悪い、と一夏が視線だけで謝罪してくるので気にするなと苦笑を返したが、あちらはどうやらそんなので止まらないらしい。

人の国の侮辱はOKで、自分の国の侮辱はNGとはずいぶん都合のいいことだ。

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五のいうよりわかりやすい」

「面白い。全員にその気があるなら私のほうでアリーナの使用許可申請を出しておこう」

「俺にやる気があるように見えるか、千冬」

「ああ、問題ない。それに」

だらーっと、脱力する俺と目を合わせて千冬がニヤリと笑う。

いやな笑みだ。切れ長の瞳を持つ彼女がやると、とても怖い。蛇に睨まれた気分になってしまう。

などと言いながら、そんな表情を見ていると思わず組み伏せたくなってくるのが不思議だ。

「ああまで言われて、お前が治まりが聞くわけがないからな」

俺を理解しているとでも言わんばかりの千冬の言葉に、今度は俺の口角が釣りあがる。

本当に人を焚きつけるのが上手い女だ。

挑発だとわかつてはいるのだが、彼女の表情を見ていると俺もついついその気になってくる。

どうせ今から俺だけ抜け出すなんて真似ができる雰囲気でもない。

何より、やはりこのまま舐められっぱなしというのは気に食わない。俺にとつて、あり得てはいけない。そんなことは認めはしない。認められないのだ。

たかだか代表候補生が……。いや、誰であろうと俺の上にいるなんてことが。

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

一夏の一言で起きた笑いで、玖瑠斗はやっと現実を意識を戻した。

どうやら一夏がセシリアに対してハンデをやるといったらしい。

俺ならともかく、搭乗時間で大きくハンデを持つてるお前がハンデを与える側じゃないだろう、と玖瑠斗は苦笑する。

と同時に、その気概を玖瑠斗は評価する。これだけ散々に言われた相手とも、勘違いとはいえきちんと勝負をしようとする一夏の姿勢に対しての評価だ。

現状把握が甘いという面では赤点だが。

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑君は、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言いすぎよ」

どこか悔しそうにする一夏を見ている玖瑠斗だが、少なくとも『男が女より強い』というのを固定観念としている内は一夏にも勝機が

あると思っていた。

確かにISに筋力はいらないし、反射神経も個々の違いを除けば男女でそれほどの違いもない。

が、空間認識能力などはその限りではなく、これは主に男のほうが優れているらしい。

つきつめれば遙か昔から男の役割が狩猟であつたことが関係しているらしいのだが、ISという同じ土俵に立てばその違いは徐々に、しかし露骨に現れるだろう。

千冬が今はまだ弱い一夏を、安全の為に干渉不可能のIS学園に入れたように、もしくは俺があらゆる国家にデータ提供する事で安全を確保しているように。

俺と一夏は、今のパワーバランスを崩してしまう可能性を持っているのだ。

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのが迷うくらいですわ。

ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？ セシリアに言って、はんでつけてもらったら？」

「男が1度言い出したことを覆せるか。ハンデはつけなくていい」

周囲を取り囲む失笑を浮かべる女子たちの中、それでも一夏はハン

デはいらないと言い切った。

その一夏の肩を玖瑠斗が叩くと思い出したように一夏が俺のほうを向く。

その表情には申し訳ないという思いがありありと見て取れて、被害者ながら笑ってしまった。

「あ、悪い。勝手にハンデなしとか決めちゃって」

「ああ、そんなのは別にいいんだけどな。ところでハンデは本当にいいんだな？」

「・・・お前もかよ」

「あら、欲しいのでしたらさしあげますわよ？」

「黙ってるセシリア。俺は一夏と話してる。その程度の頭は持つてる」

セシリアを見ることがすらしなままの玖瑠斗の罵倒で、セシリアが絶句しわなわなと震える。

「それで、一夏。ハンデはなしでいいんだな？」

「当たり前だ」

「そうか」

ばんばんと一夏の肩を叩いてやり、俺は今日始めてセシリアに向き直った。

困惑した様子の一夏とクラスメート。そして渦中の中心たるセシリアの怒りに震える顔が最高に笑える。

「千冬、アリーナの申請は取れたか？」

「最短で一週間後の放課後だな」

「さすが、仕事が速い」

さて、これで舞台は整ったわけだ。

セシリアはこちらを舐めきっているから、その油断をつけば一夏の勝率は飛躍的に上がるだろう。

俺はどんな形でも勝てればいいと思っているが、一夏は真剣勝負を望んでいるし、ブルー・ティアーズであれば特性は把握している分、準備もしやすい。

彼女が全力で来たとしても、初めての戦闘にはうってつけの相手ともいえる。

そんなせっかくの獲物に、手加減や油断などされては困るのだ。

これから一夏が自身の身を守っていくうえで、大切な財産となるだろうが故に。

「というわけだ。一週間後までに、代表候補生の辞退届けでも書い

ておけよ？」

「な、なんで私が」

「何でか。決まってるだろ？ 一週間後の勝負でもしお前が負けたなら、俺は今後一切イギリスにデータの提供をしない」

「なっ！？」

ならば、俺がセシリアに本気を出させればいい。

その上で一夏と戦わせ成長を促し、尚且つ俺が本気のセシリアを叩くこと。

条件はなんでもよかったが、これに関してはセシリアは・・・というよりイギリスは無視できないだろう。

「お前の、というかイギリスの第3世代機ブルー・ティアーズがいたい何処の誰のデータのおかげで生まれ、成り立っている機体か。よく考えてみることだ」

イギリスの第3世代機のブルー・ティアーズ。

その機体の最大の特徴であるのが、名前の由来でもある第3世代兵器のBT兵器ブルー・ティアーズだ。

ビット型武装でまだ試験段階とはいえイギリスを象徴する兵器だが、何を隠そう。

その元になったのは玖瑠斗の提供したISデータだ。

当然、イギリス単独での開発ではなく、試験段階という事もありイギリスはまだまだデータを必要としている。

もしも玖瑠斗がそれに対しての協力を断るようなら、イギリスはこれからIS開発において大きな遅れをとる事は確実だ。

場合においては第3世代機の開発頓挫により、何百・何兆という開発資金が泡となる事に加え、国としての力の失墜にもなる。

そんな事になれば。

いや、玖瑠斗が『協力しない』と言った時点でセシリアは代表候補生を降ろされるだろう。

自身の発言が原因とはいえ、まったく予期しない形で代表候補制としての危機に陥ったセシリアは、それでも一切を媚びることなく玖瑠斗と一夏に今日初めて敵を見るようなきつい視線を向けていた。

「織斑一夏」

「なんだよ」

「万が一にもわたくしの敗北はありえませんが、すみませんがハンデは無しでいかせていただきますわ」

それでも自分で言った事を曲げるのがそれほど悔しいのか、俺を睨み付けたセシリアが一夏に言い放つ。

「私の。イギリス代表候補制のセシリア・オルコットとブルー・テ

「アイズの全力を持ってお相手いたしますわ」

面白い。

玖瑠斗は素直にそう思った。

たかだか劣化コピーが俺に届くと。俺を超えていると思っっている辺りが、無様で、滑稽で、酷く面白い。

「決まったならさっさと席につけ、ばか者」

「・・・ああ、わかってる」

とん、と主席簿が肩に置かれる。

普段なら気づかないことなんてないはずの、軽い軽い接触。

『また、変なところへ意識を飛ばしてたか』と思わず苦笑いする俺。そんな俺をどことなく安堵の感情がこもった目を向けていた千冬を、何やら一夏が信じられないものを見るかのように見ている。

それにしても、まずい。

どうにも俺とセシリアは相性が良くないようだ。

今までは簡単に抑えていた筈の感情が、ついつい溢れてしまいそうになることが多い。

千冬がそれを悟って治めてくれはしたが、どうにもガス抜きが必要なようだ。

まあ、相手に困ることはないだろう。

右を向いても左を向いても、前にも後にも相手は正に選り取り見取

りなのだから。

「早く終わらないだろうか」

「これから始まるというのにいい度胸だな、黒峰」

眉を寄せた千冬。あわあわと乳を揺らす麻耶。勇者を見るような夏。

少しばかり不機嫌になった千冬の厳しい監視の中、玖瑠斗は今夜の為にしっかりと英気を養った。

第6話（前書き）

予定してなかったキャラが登場して、話しがどんどん長くなった。

ので、分割しますた（ゝ・・）

どうしてこーなったのか。

お酒って怖いよね。

第6話

「・・・・・・・・」

周囲の喧騒に起こされたはいいが、未だまともに働かない意識。普段通りにニコチンの補給を肺と脳が訴えるのを感じ、霞む思考のままに懐へと手を伸ばしたところで、やっと自身が今どこにいるのかを理解する。

満足に煙草も吸えない環境というのは何年振りだろうか。こうしてタバコという一種の娯楽を封じられてみると、逆に吸いたくなるのは人間の性というものだろうか。

どうでもいいことだ。
どうでもいいことだ。どうにもならないことだ。
本当に、どうでもいいことだ。

「一夏、帰るぞ」

「え？」

「なんだ、その気の抜けた返事は」

授業が終われば帰る。
何も間違っただけだ。

しかし、一夏の反応を見るに、どうやらお互いの状況と情報に相違

があるのは間違いない。

「まさか、まだ寮の部屋番聞いてないのか？」

「いや、そもそも男の入学って予定外だったらしくてさ。一週間は自宅通学ってことになってるんだ」

どういうことだ、と玖瑠斗が首を傾げる。

確かに男の入学は予定外だったかも知れないが、急な決定だった男くるとの部屋は確保されている。

だいが無理やりにねじ込んだ形だったが、まあ権力とは有効に使わなくてはいけないのだ。

というか一夏の部屋がないのって、ひょっとすると俺が一人部屋を望んだのが原因なのだろうか。

そこまで小規模な学生寮ではないはずなんだが・・・。

「まあ、別にいいか。さっさと帰るぞ一夏」

「どうしたんだよ、そんなに急いで。何か用事でもあるのか？」

「いや、早くしないと囲まれるぞ。主に一夏が」

「・・・そうだな、急ごう」

面倒なことになったら一夏を犠牲にしよう、と友情溢れる思いを抱

いていたのを察したのか。

一夏が身震いしながら手早く荷物をまとめ上げていく。

あの眼をきらきらさせる肉食獣の中に、単身で残る勇気は持ち合わせていないらしい。

「あつ、まだ教室にいたんですね。よかったです」

「真耶か。どうしたんだ？」

「も、もう！　くるとくん、先生を呼び捨てにしちゃダメです」

相も変わらず。

どうにも小動物のような印象しか持たないような睨みを向ける真耶。

背丈は平均らしいが、それでも周り比べると小さいと感じるのは彼女の持つ雰囲気のせいだろうか。

そして、書類を抱えることで強調される胸以外は、学生ですといわれても納得できる。

「で、どうしたんだ？」

「あ、そうでした。えっとですね、織斑くんの寮の部屋が決まりました」

え？と一夏が首を傾げる。

まあ、ついさっき自分で一週間は自宅通いだと言っていたのだから

無理もない。

そこは、わざわざ通わなくていいなんてラッキーぐらいに思っているれば楽なものを。

「たぶん、政府からの特命だな」

「特命？」

「はい、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです」

『聞いていませんか？』と一夏に耳打ちする真耶。

その距離は近く、一夏が身悶えていることからたぶん話すたびに耳に息がかかっているだろう。

それを、わくわくと見つめるクラスメート。

そして、何やら恐ろしい表情でこちらを見る篠ノ之妹。

『なぜ止めない！』と視線で訴えられるのはさすがに理不尽ではなからうか。

「あの、山田先生、耳に息がかかってくすぐったいんですが」

「あつ、いや、これはそのつ、別にわざととかではなくて」

そう言いながら玖瑠斗をちらちらと伺い見る真耶。

しかし、残念ながら玖瑠斗を嫉妬させるにはまだまだだった。

玖瑠斗の表情に変化がなかったのを見て、安堵と共に複雑そうな感情を混ぜたため息を吐く真耶。

曇った表情のままキーと部屋番号のかかれたメモを渡すものだから、一夏の表情が微妙なものになっているのが笑える。

「一夏、部屋が決まったなら早く帰るぞ」

「いや、そうは言っても荷物も何も用意できてないから今日は帰らないと」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

真耶の言葉を引き継ぐというか遮って現れた千冬。

さすがはブラコン。過保護だなとニヤニヤ笑う玖瑠斗から、千冬はわずかに顔に赤みの挿したのを隠すように顔を反らす。

とは言っても、それは微々たる動作であるわけで、彼女に慣れ親しんだものしか察することはできないし、その意味を理解しているのは玖瑠斗だけだろうが。

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう?」

荷物の揃え方が男らしすぎるだろう。

もう少し生活が潤うアイテムがあってもいいと思うんだが。

携帯があれば多少のことはカバーできるだろうが。

「それじゃあ時間を見て部屋へ行ってくださいね。ちなみに夕食は6時から7時、寮の一年生用食堂でとって下さい。

シャワーなどは各部屋にありますけど、大浴場も使えます。

学年ごとに使える時間は違いますけど……えっと、その、織斑君とくると君は使えません」

「え、何ですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に入りたいのか？」

「俺はかまわない」

「誰も聞いてなどいない、ばか者」

玖瑠斗の言葉に、顔を真っ赤に染めて上目遣いで熱い視線を送る真耶を千冬が出席簿で頭を叩くことで気つけするのをしり目に、玖瑠斗は一夏を連れてさっさと教室を去っていた。

いい女は可愛がってやりたいが、まきぞいはごめんなのである。

第7話（前書き）

一夏の部屋での初日を書くだけの単純な話だったのに、横からインターセプトした人が。

そのせいで、3倍に伸びたお話し。

もうお酒飲んで、小説は書かないよ（・・・）

第7話

「周りを女子に囲まれた部屋か。最高だな一夏」

「冗談はやめてくれ・・・」

周囲から突き刺さる視線にどよんと一夏が湿っぽい空気を背負う。それを見る玖瑠斗がずいぶんと余裕そうなのにはわけがある。というより、IS学園に対して強引に1部屋を、しかも指定部屋を開けさせたのが理由なのだが、まああらゆる国家の干渉を受けないと言っているので表向きに公表されることはない。

しかし、それも彼なりに配慮しての結果なのだ。

相部屋とはいえ部屋ごとにシャワーもあるしトイレもあり、そこらのホテルよりもよっぽどしっかりしているうえに防音もそれなりという部屋だが・・・寝静まった夜中、静まり返った中での声なら漏れることもあるかもしれない。

迷惑を与える隣人は少ない方がいいだろうという彼なりの配慮による、寮の端の部屋を確保だった。

「じゃあ、また飯時に」

「ああ、一夏が無事にその時間を迎えられたなら、な」

玖瑠斗の言葉に一夏が首を傾げる。

どうやら一夏はどうして無理やりにもIS学園の寮住みにされたのかを理解していないらしい。

自分の身に対する危機感がどうにも薄い気がしてならないが、本来はこれが普通なのかもしれない。

今の彼は『純粹なISを起動できる世界で唯一の男』である。

データはIS学園に入学したことでの国も入手できるから国という大きすぎる敵はいないだろうが、それを手に入れたい・独占したいという組織は手つかずと言ってもいい。

あくまでIS学園に入学するのは国に対しての抑止であつて、それ以下の組織には有効ではない。

それを念頭に考えれば、寮内とはいえ1人よりも2人の方が安全。

しかし、俺は1人部屋となれば・・・まあ、相部屋の相手は女という事になる。

加えて、あのブラコンの千冬が見ず知らずの女に弟を預けるわけがない。

となれば

「天に召します我らの父よ・・・」

一夏の入った部屋から恐怖に染まった声が上がるのを背中であいてみると、それに釣られるようにそれぞれの部屋から女の子が顔を出していく。

形容しがたい表情で部屋から飛び出した一夏を見て、思わず玖瑠斗が祈りを捧げた。なかば反射的に、信じてもない神に。

「女神なら会ってみたいけどな」

このIS学園における唯一の男友達が玖瑠斗に視線を向けた。しつかりと結ばれた視線から、脳へと何かが流れ込んでくる。テレパシー能力に目覚めてしまうあたり、一夏はかなり必至らしい。

『助けてくれ』

『祈りぐらいはくれてやる』

「おま、玖瑠とうおおおおおおお!？」

そんなアイコンタクトが交わされ、思わず一夏が声を上げようとしたとき2人の結び合った視線を遮るように現れた木刀。しかもドアを突き破って。

声を出したことで、ドアに背を預けている一夏の所在がばれたのだろつ。

前髪をかすめた木刀に、一夏はそれどころではないみたいだが。

一夏を救うのは彼が最後に力の限り助けを求めた『玖瑠とうおおおおおお』さんに頑張つて頂こうか。

変わった名前だとは思うが、名前で人を判断してはいけない。

きつととてもいいやつなんだろう。こんな状況で助けを求めるぐら이다から、親友なのかもしれない。

そして、いい男だ絶対。

「とはいっても、部屋自体はそれほど離れているわけではないんだけどな」

廊下は一本道。

よほど離れている部屋でなければ視界にぐらいは入る。

振り向いても一夏は見事室内に入ること成功したらしく、一夏の姿は見たらなかったが。

祈った甲斐があったもんだ、と友達思いの自分を誇る彼は、何度も言うが無神論者だ。

「さて、預かったキーは・・・」

千冬から預かったキーを使いカギを開けると、これでやっと煙草を吸えると大きく息を吐きながらドアノブを捻る。

「ああ、その前に・・・どこかのお嬢さんのお相手をするべきなのかな？」

にこり、と玫瑰斗が外行き用の笑みを無人のはずの室内へ向ける。

まだ昼間だというのに締め切られたカーテンと、明かりがついていないことで真つ暗な部屋。

その部屋の奥で闇に溶け込むように佇む一人の女を玫瑰斗はとらえ

ていた。

気配を隠してここにいた自分の存在を初めからわかっていたかのよう
に声をかけた玖瑠斗に、面白いものを見つけたとばかりに笑みを
浮かべる女。

その仕草と、暗がりにもわかる鮮やかな青髪が不思議なコント
ラストを生み出し、顔はよく見えないが恐らく彼女は美人だと玖瑠
斗の本能的なものに訴える。

「ふふふ、初めまして。このIS学園の現生徒会長の更識さらしき 楯無たてなし。
よろしくね」

「ああ、よろしく17代目」

「やっぱり知ってるんだ？」

「更識なうえに、『楯無』まで拝命してる女を知らないほど俺は表
側でないんでね」

煙草を取り出すと最後の一本を抜き出し、常に持ち歩くやたらと機
械的なライターを取り出し火をつける。

およそ半日振りだろうか。

肺に煙とニコチンが送り込まれる感覚を気持ちよさそうに堪能する
様は、生徒会長と名乗ったとはいえ目の前に不審者がいるとは思え
ない。

「へえ、それが君のISもどき。囚プリズナー・セラフわれた熾天使なんだ？」

「……さすが更識はずいぶんと物知りだな」

ほんの一瞬、呼吸に狂いが生じたのを自身で感じ取り思わず舌打ちをしたくなる。

こういう相手にはほんの少しの反応も見せない方がいいのだが、正に呼吸の合間。

カードを切るタイミングが絶妙だった。

こんなことをするような相手だ。今の反応を見逃すほど甘いわけがない。

自分らしくないな、と玖瑠斗は自身を嘲ることで平静を保つ。

女に振り回される自分など、らしくない以外になんと見えようかと。

「それで？ 男の部屋に女が1人で来るってのは、そういう事だって認識でいいのかな？」

「お姉さんは高いよ？」

白煙の向こうで、女が笑う。

これが金でどうにかなるって意味ならどうにでもできたんだが、残念ながらそんなものに執着を見せるタイプではないだろう。

そんな人間であつたら『対暗部用暗部』の一族筆頭なんて務まらない。

「そうか、別に抱かれる気がないならさっさと部屋を出て行った方がいい。男は狼らしいからな」

「あはっ 無理やりつてのはよくないと思うよ？」

だったらその笑みを引つ込めろ、と内心で玖瑠斗が毒づく。

早い話がこの更識楯無はやりづらかった。

一向に主導を握れないし、握れる気配もない。

伊達に『楯無』ではないようだ。

煙草を吸ったことで、昼間よりまだいぶクリアになった頭で思考する玖瑠斗。

片っ端に更識家現『楯無』に関する情報を脳内から引き出していくが、しかし此処に来るにあたって特別調べたというわけでない人物に関する情報がそう多いはずもない。

玖瑠斗は目の前で『きゃっ』と言いながら自分の体を抱きしめる楯無の真意が読めないでいた。

「心配ならさっさと出ていけ。わざわざ危険な女を抱くほど困ってない」

「女の敵だね？」

「味方であろうと常に努力してるんだけどな、生憎と俺の愛は伝わりにくいらしい」

部屋に1つしかない出入り口であるドアを開放するように、俺は壁に体を預け煙草を吹かす。

これで出ていけないというなら、何かしら理由があるか、それともただからかいに来ているのか。

・・・結局、状況は変わらない。

「複数の女性に愛を捧げるからじゃない？」

「俺の愛は1人に捧げるには重すぎるからな」

そろそろ落ちるか、と啜えた煙草の先で燻ぶる灰を見て思う。

どこか灰皿になるようなものはないか、と部屋を探すが生憎と今初めて住人を迎え入れた部屋にはそのようなものは何一つとしてなかった。

「ふふふ、冗談だよ。あなたはどの女の子も愛してなんてないでしょ？」

「失礼だな、俺は世界の半分は愛してるんだ」

「半分？」

「女だ」

俺の言葉に、楯無がくすくすと笑う。

いよいよもって、こいつの目的がわからない。

「出会ったばかりだけど、あなたのことはだいぶ理解したと思うよ？」

「俺は出会って5分足らずで理解されるような薄っぺらな人間か？」

人の部屋に不法侵入するような相手と、まるで軽口のようなものをかわしている自分に玖瑠斗は気づいて驚いた。

そうそう誰彼かまわず信用するような性格ではないのは自分が一番知っているし、そんなことができるほど優しい人生でもなかった。

ああ、確か17代目は誰彼かまわず虜にするような、人たらしめいたところがあるのだったか、と記憶の片隅から新たな情報を引き出す。

「ふふふ、今のも冗談　秘密の多いあなたを理解するのはお姉さんにも難しいわ」

「秘密が多いほど、男も輝くからな」

「そうだね、素直な男の子も好きだけど秘密の多い男の子も好きだよ　ねえ？」

ダブル・スタフ
二重殺し？

「…………ふう。更識楯無、これ捨ててくれ。空になっちまった」

その言葉と同時に、くしゃくしゃになった煙草の空き箱がふわりと宙を舞う。

一瞬、室内の空気が凍った錯覚を覚えた楯無だったが、なんでもない軽い調子で投げられた空き箱に意識が向かった。

「　　っ!？」

「やっぱり、これぐらいじゃダメだったか」

畳み掛けるべきだったな、と玖瑠斗が小さく呟くと同時に、誰にも受け止められることのなかった空き箱が床に落ちる。
空き箱に意識が向かった一瞬の内に間合いを詰められた楯無の表情から、この時初めて笑みが消え去っていた。

「どこで聞いたか、どこで手に入れたかなんて知ったことじゃない。けどまあ、口に出すなら・・・」

「くっ!？　早いね!」

「お前も、さすがは楯無を名乗るだけはある」

捻りを与えて突き出すように向かってくる拳を、楯無は受け流しその腕を極めようと腕を絡めそうとする。
しかし、玖瑠斗は突き出した腕を回転させるように絡め手を払い、

その腕の反動を使つての後ろ回し蹴りに楯無が大きく飛び退る。

「それ、早く取らないと火傷するぞ？」

「え？」

制服の胸のボタンに引つ掛かるようにして未だ煙を上げるそれは、間違いなく玖瑠斗の吸っていた煙草そのもの。

『いつの間に』とそう思う間もなくそれを払いのける楯無の目の前には既に玖瑠斗が迫っていた。

咄嗟に玖瑠斗に向かって拳を放つ楯無だったが、しかし目前に現れたそれにその動きをやめた。

『量子変換を終えたハンドガン』が真っ直ぐ自分を狙っているのを見て即死を免れるために反射的に頭を下げる。

「チェックメイト」

「あ、あれ？」

一体何がとそう思いながらもゆっくりと迫りくる床を楯無が見つめる。

どさ、と襲つ衝撃に備えようとしても体は不思議と言つことを聞くことがなく……。

そんな彼女の前にごと、と音を立てて先ほどのハンドガンが落下す

る。

『やられた！ 狙っていたわけじゃなかった』と悔しさを覚えながらも、逆転のために直ぐそこにある武器に手を伸ばす。

しかし、やはり体は言うことを聞いてくれない。それ以前に視界すら定まらないのはどういうことだろうか。

「な、にが・・・」

「軽い脳震盪だ。数分もすれば元に戻る」

「それを、おと、りに？」

「目の前に銃口があつたら避けるだろう？」

だが、生け捕りにするには銃というのは不向きな得物だ。それ以前に、こんな至近距離で使う必要もない。

故に囮。本命は顎先への掠めるような一撃。

人間の体とは存外に脆く、ほんの少しの衝撃でも意識は刈り取れるし、平衡感覚なんかを狂わせるのはだけなら強い一撃など必要ない。

「・・・ちよつと油断したかな」

「そうだな、本気のお前ならこうはいかなかった」

楯無の言葉に容易に頷きを返すと、玖瑠斗は楯無の上に跨り地に落ちたというかだいぶ酷い扱いをしてしまった愛銃を ベレッタP

x4 Storm を取ると緩慢な動作で突きつける。

「ISの拡張領域に、そんなのを入れてるのなんて初めて見たよ」

「部分展開と同じだからな。ほとんど要領も食わないし重宝してる」

脳震盪の影響は徐々にだが確実に消えてきているらしい。

すでにはつきりと聞き取れるレベルにまで回復した言語能力から、
玖瑠斗はそれを把握する。

「ふふふ・・・負けちゃったかあ・・・」

「なんだ、嬉しそうだな？」

「そう、かもね。歳の近い誰かに負けたのは初めてだから・・・
それで？ 私をどうするの？」

「ああ、それなんだけどな」

彼女に馬乗りになったまま懷をこそごとと漁る玖瑠斗だが、どうやら
所望の物が見つからないらしい。

一挙一投足すら逃さないと玖瑠斗を見る楯無だったが、もう少しで
脳震盪の影響は完全に抜け去るといつのを自身の体の調子から理解
した楯無が時間を稼ごうと話しかける。

「ああ、これでいいか」

「・・・へ？」

しかし、どうやらそれは反対に彼女自身を追いつめるという最悪の形になっていた。

更識で、加えて楯無を名乗る彼女にすら気づかれないほどに自然な動作で、彼女の胸元からタイが抜かれる。

楯無がそれを頭で理解したのは、彼の手で揺れるお気に入りの黄色を見た後だった。

「ああ、あまり動くな。痕になる」

「え、え・・・と・・・？」

抜き取ったタイを使い、まるで当たり前のことをするかのような調子で話しながら玖瑠斗は楯無の腕を拘束していく。

しかも楯無ですら抜けない拘束とはいったいどういう事なのか。

「え、と・・・何をしてるのかな？」

「さっき俺が言った『わざわざ危険な女を抱くほど困ってない』っての覚えてるか？」

こくり、と楯無が1度頷く。

こんな状況でも未だに力のある目を向ける楯無に、玖瑠斗の中说いようの知れない感情が鎌首をあげていく。

「実はだ、俺は危険な女ってのはそう嫌いじゃない」

玖瑠斗の籠絡を狙った女は1人や2人じゃない。

むしろ彼に近づく女性ほとんど全てが、それ目的に近づいているといってもいいぐらいだ。

だからこそ、彼にとって千冬や真耶は特別でもあり、散々迷惑をかけられながらも稀代の天才を拒絶できないのもそういった理由なのだろう。

「相手が悪かったんだよ更識。相手が悪かった」

口角をあげて笑う玖瑠斗に、たらりと楯無の頬を汗が伝う。

油断があったとはいえ、体術で負けた相手に馬乗りになれている状況というのは、かなり危機的状況ではないのかと。もちろん貞操の。

「あ、あの。実はお姉さん初めて・・・」

「安心しろ、優しくしてやる」

『だったらこれ、解いてくれないかな』 などと言う軽口を、聞く必要はないとばかりに玖瑠斗が塞ぐ。

「んっ!?!・・・っ・・・ふう・・・」

「いい声だ」

自身の体の内側を誰かに初めて征服されていくことに、同時にそれに身をゆだね始めている自分に楯無が気づき気を持ち直す。

自分はそう安い女ではない。そうだ、この舌を噛みちぎってやろうと。

しかし、そんな楯無の反応すら見越したように彼がより濃厚に舌を絡める。

このまま噛みついたら、お前も舌を噛み切るぞとばかりに濃厚に。

反撃の機を逃し、もはやなすがままになっている楯無への、絡め、啄み、吸いつくような口づけが、彼女の体と心を震わせていく。

長く長く、深く深く。

どこかおぼろげな意識の中、静寂に満ちた部屋の中でいつそ自分の心臓の音だけが煩く響いているような感覚に見舞われて赤面する楯無。

そのまま互いの口元から繋がる銀糸をぼろりと眺めていると、それをおかしそうに眺める玖瑠斗と目があつた。

「なに、これ・・・初めて・・・頭がぼーっとする」

「なんだ、本当に初めてだったのか。息を止めてるからだよ」

ああ、この感覚は酸欠だったのか。と楯無が笑う。

脳震盪よりもずいぶん心地いいものなんだな、などと考えた自分に対して。

「キス・・・丁寧なんだ」

「初めてじゃなかったのか？」

「・・・ん・・・」

突然に頭を撫でられて、鼻にかかったような声が楯無から漏れだす。

「初めてだけど、わかるわよ。あなたのキスには、いろいろ詰まってるから」

「キスで語る男ってのも悪くないだろ？」

信用ならないはずのその男のペースに乘せられ、こんなことをされて、そして恐らくこれからもつと凄いことをされるのだと思うと不安で不安で堪らなくて・・・でも、それが不快でない。

テラテラと濡れて怪しく光る唇をペロリと舐めた玫瑰斗が蕩かすよ

うな笑みを浮かべるのを見て、ずるい男だと楯無は思っ。

「ただの女の敵よ」

「そうか、だったら体で語るとするか」

「ひゃっ！・・・ふう・・・変な感じ・・・」

彼の手が顔から顎へと滑っていくと、自分の体が意思を無視して小さい痙攣のように震えていく。
そのまま首を伝い、体を這っていく彼の手にその都度反応を返してしまう自分の体が、どこか怖くて思わず体が固まる。

「大丈夫か？」

そんな緊張を、玖瑠斗がキス1つで解いていく。
それどころか、こちらを窺うように見つめる玖瑠斗と目を合わせると、安心したのか体から力が抜けていった。
そして、体の内でふつつと燃え上がっていた熱が、いよいよもって自身の制御を離れていく。

「恥ずかしいよ」

「恥ずかしがっても別にいいさ。ただ有りのままにだ、楯無」

「あ、名前・・・」

彼の舌と指が、体をなぞっていく。

『初めて名前を呼ばれた』なんてまるで恋する乙女かのような幸せを感じながら、しかしそんな思考も直ぐに彼に染められていく。

そのまま彼女の体の中で制御を離れた熱は徐々に確実に燃え上がっていき、頭を白く染め上げるまでに時間はかからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2543r/>

IS インフィニット・ストラトス 適当な性格のオリ主

2011年10月7日21時47分発行